『津田塾大学紀要』第 51 号（2019 年）197-221 頁

日系アメリカ人収容所の外から見た再定住

――チャールズ・キクチの日記を中心に――

増田　直子

はじめに

太平洋戦争勃発後、アメリカ西海岸の在郷軍人会などの排日組織や政治家、マスメディアなどの要求や陸軍の主張を受けて、1942 年 2 月 17 日にフランクリン・D・ローズヴェルト大統領は大統領行政命令第 9066 号に署名をした。これは、軍事指定地域を設定し、そこから日本人移民及びアメリカ生まれの彼らの子孫（両者を合わせて以下日系人）を立ち退かせる権限を陸軍に与えるものであった。1942 年 3 月にカリフォルニア、オレゴン、ワシントン州およびアリゾナ州の南半分が軍事指定地域に設定され、この地域の日系人約 12 万人が強制的に立ち退きさせられた。彼らはまず「仮収容所」（Assembly Center）と呼ばれる施設に収容され、その後全米 10 カ所に作られた収容所に収容された。[1]

しかし、立ち退きが始まってから約四カ月後の 1942 年 7 月に軍事指定地域以外への再定住政策が始まった。収容所の日系人を管理していた「戦時転住局」（War Relocation Authority 以下 WRA）は、アメリカ社会に適応しやすいと見なしたアメリカ生まれの日系二世を中心に出所させ、内陸部や中西部や東部に再定住させた。1942 年 7 月から 1944 年 12 月までの間に約 3 万 2 千人が収容所を出た（WRA［1946 1975a, 30）。

チャールズ・キクチもその 1 人である。キクチは 1917 年カリフォルニア州ヴァレホで 8 人兄弟の 2 番目に生まれ、複雑な家庭環境から兄弟の中で 1 人だけ孤児院入れられた。[2] 強制立ち退きの時にカリフォルニア大学バー

クレー校の学生だったキクチは、同校の社会学者ドロシー・トーマスの研究プロジェクト「日系アメリカ人立ち退き再定住計画」(Japanese American Evacuation and Resettlement Project 以下 JERS）に参加し、研究者としてタンフォラン仮収容所（カリフォルニア州)、ヒラ・リバー収容所（アリゾナ州）および出所後のシカゴでフィールド・ワークを行い、日系人にインタビューをした。キクチが主に 1943 年 4 月から 1944 年に行ったインタビューをもとに、収容所からシカゴに再定住した日系人 15 人のライフ・ヒストリーを収めた研究書が JERS の成果として出版されている[3]（Thomas 1952)。さらに、キクチは真珠湾攻撃の日から 1988 年に亡くなるまで詳細な日記を残しており、1941 年 12 月 7 日から 1942 年 8 月 31 日までの日記は *The Kikuchi Diary* として出版されており、真珠湾攻撃の日からタンフォラン収容所（カリフォルニア州）での生活を綴っている（Kikuchi［1973］1993)。それ以降の出版されていない日記においても、キクチは JERS のためのインタビューの内容や彼の家族、戦争、人種差別、日系人の再定住についての観察や考えを詳細に記している。[4]

キクチはヒラ・リバー収容所を出て 1943 年 4 月からシカゴで再定住した日系人たちに精力的にインタビューをした。その内容の多くは戦前から仮収容所や収容所を経て再定住先であるシカゴでの個人の生活についてであったが、1944 年 12 月になるとキクチや再定住した日系人の関心事が新たに増えることとなった。1944 年 12 月 17 日に陸軍省は軍事指定地域からの立ち退き令を撤廃し、1945 年 1 月 2 日から日系人は西海岸に帰還することが可能になった。この発表を受けて WRA は 1944 年 12 月 18 日にすべての収容所を翌年の 1 月 2 日以降 6 か月から 1 年以内に閉鎖することを発表した（WRA［1946］1975c, 143)。この発表は、収容所にいる日系人だけでなく、再定住した日系人にも西海岸に戻るのか、今いる場所に留まるのかの選択を迫るものであった。また、再定住した日系人も収容所に家族のいる者たちは、家族が収容所を出た後どうするのかを考えなければならなかった。

日系人の再定住に関する研究としては WRA による再定住計画の報告書（U. S. Department of the Interior 1947; WRA［1946］1975b）や WRA 長官ディロン・マイヤーの回顧録（マイヤー 1978）が出されているが、日系人を管理する側からの視点で捉えられており、日系人の視点は抜け落ちている。JERS の一員だったリチャード・ニシモトやジェームズ・サコダは収容所閉鎖が発表されてからの収容所の日系人の状況を分析したものを残している（Nishimoto 1995; Sakoda 1988)。彼らが残した資料や分析は、WRA の再定住政策や収

容所閉鎖に抵抗の姿勢を示して終戦まで居残り続けようとした日系人の存在や、WRA の強引な収容所閉鎖の政策を明らかにした。また、西海岸に帰還した日系人のコミュニティ再建（Robinson 2012）や中西部や東部に再定住した日系人のコミュニティや他の人種との関係（Brooks 2000）、キクチの再定住先のシカゴの経験や人種関係に対する考え（Briones 2012）、戦時中に再定住した学生（Austin 2004; Okihiro 1999）についての研究も蓄積されつつある。しかし、こうした研究の多くは、再定住した日系人を新たな場所で生活を始め、収容所とは切り離された存在として扱い、収容所に残った人びととの関係性の視点が欠落している。また、収容所の閉鎖の研究は収容所に残っている日系人が主であり、戦時中に出所した日系人が 1944 年 12 月の WRA の収容所閉鎖の発表以降、収容所に残された家族や既に出所した自分たちの将来の見通しについてどのように考えていたかについては十分に述べられていない。再定住した人びとの視点から収容所閉鎖を見ることで、収容所を出た後の日系人の生活の再建のあり方を知る一助になり得る。

そこで本論文では、チャールズ・キクチの日記を中心に、戦時中に既に再定住した日系人たちが、1944 年 12 月に出された収容所閉鎖の発表を受けて収容所に残っている日系人との関係の中で、再定住や自分たちの西海岸への帰還について 1945 年前半当時にどのように考えていたのかを考察する。キクチの日記にはトーマスの研究書には収められていない 1945 年以降のインタビューやキクチ個人の経験が記されており、当時の日系人の考えを知る手がかりになると考えられる。まず、WRA の収容所閉鎖の発表と 1945 年以降の再定住政策についてキクチの周囲のシカゴ在住の日系人たちがどのように受け止めていたのかを明らかにする。そして、収容所に残っていた家族や既に再定住した日系人が西海岸に戻ることをどのように考えていたのかを検討する。最後に、キクチ自身が自分自身の家族の再定住についてどのように考え、行動したのかを考察する。

1. 収容所閉鎖の発表と収容所の外の日系人

1942 年 7 月に WRA は収容所の外での就職先や進学先が決まった者の出所を許可するという「無期出所許可」の規定を発表した。しかし、出所の規定が厳しかったため、1942 年 10 月以前では出所者の率は収容者 100 人つき 1 人以下だった。そこで、規定を緩和し、短期の出所や労働集団の出所も認め、二世だけでなく一世も出所の対象とした（WRA［1946］1975b, 15-17）。それでも、WRA は出所する人びとを大変注意深く選んだ。彼らの多くは大学教

育を受けており、宗教的にはキリスト教徒で、都市部出身の二世だった。こういった人びとは宗教団体や教育団体からの援助を受けやすく、再定住に有利だった。WRA はアメリカ社会に適応しやすそうな人びとを選び、「リトル・トーキョーの再建を考えないように警告」し、1 ヵ所に固まらせず「国中に拡散」させようとした（Thomas 1952, 125; Drinnon 1987, 58）。

1944 年になると、限られた一部の人に出所許可を与えていた再定住政策は、より多くの人を出所させようというものに変化していった。家族単位の再定住のために相談所を収容所内に開設して、将来の計画を立てる上での適切な方法を助言するとともに、各人の抱える諸問題を把握しようとした。また、出所後の生活に自信のない人のために、1944 年 3 月に試験的出所規定を発表し、うまくいかなかったら試験期間後に収容所に再び戻ってきてもよいとした（WRA [January 1 to June 30, 1944] 1992, 4-5）。WRA は積極的に日系人を収容所から出して、再定住させるようにした。2 代目の WRA 長官ディロン・マイヤーは「軍事的必要性」がなくなれば西海岸への帰還の可能性さえ示唆するようになった（『ハート・マウンテン・センティネル』1944 年 4 月 8 日）。

1944 年が選挙の年であり、西海岸への政治的配慮から軍事指定地域からの立ち退き令の廃止は難航したが、ついに 1944 年 12 月 17 日に陸軍省は 1945 年 1 月 2 日に立ち退き令を撤廃することを発表した。そして翌日 WRA はすべての収容所を 6 カ月から 1 年以内に閉鎖すること、出所許可の規定を廃止することを発表した[5]（WRA [January 1 to June 30, 1945] 1992, 1-3）。

陸軍省や WRA の発表の前には、多くの二世は将来の計画については曖昧な態度を取っていた。将来の計画は「誰にも予測できない答えられない答え」であった（Kikuchi October 2, 1944, 6080）。

彼らの多くは住宅差別や仕事探しで苦労していた。WRA は 1942 年 11 月にはコロラド州やユタ州などの山間部州に、1943 年には中西部や東部の主な都市部にフィールド・オフィスを開設し、日系人のための雇用先を確保し、再定住しようとする人たちに紹介し始めた。また、受け入れ先に好意的なコミュニティを作り、日系人がそこに溶け込めるようにしようとした（WRA［1946］1975b, 19-21）。しかし、資産がないため自営業や農業を始めることはできず、たとえ教育を受けていても低賃金の未熟練の仕事に就かざるを得なかった（Robinson 2012, 45-46）。工場長の扱いに憤慨して仕事を辞めたある二世はキクチに次のように語った。

二世はとても不安定な立場にいるとわかっている。たとえ稼ぎが良くて

も、私たちの多くは非熟練の仕事をしている。失業者のすべてを受け入れてくれる日系コミュニティがないので、私たちは困った立場にある。労働者の一員として仕事に溶け込みたいのに、常に隅に追いやられ、ボスは仕事の一員として受け入れてくれず、私たちを「日本人の労働者」と考えている（Kikuchi October 6, 1944, 6111）。

住宅不足と人種差別のため、住宅探しは職探しよりもさらに厳しい状況であった。シカゴに防衛産業の職を求めて人が流入し、住宅不足が悪化した。そのため、家主は入居者のえり好みができるほどであった。日系人がシカゴにやってきた1943年当時は、アフリカ系や移民を特定の地域に制限する住居契約（restrictive covenants）があったため、日系人も限られた場所に住まざるを得なかった（Brooks 2000, 1674; Briones 2012, 163）。日系人が集中している地域は特に部屋を見るのが難しく、住宅不足で家主が優位な立場にあった。キクチは友人の家探しを手伝った時の住宅差別の例を挙げている。家主は非常に親切そうで、部屋を貸すことに乗り気に見えたのに、既に他の人が保証金を置いていったと言った。後で戻ってみる空き部屋の看板が残っており、それを問いただすと、年寄りなので椅子に立って看板を下ろすのが危険だからだと説明されたという。しかし、本当の理由はその建物を所有している不動産会社がアジア系に貸すことを拒否したからではないかとキクチは記している。他の入居者が日系人の入居を嫌がって出ていくという理由や、不動産の価値が下がるからという理由で断られたという日系人の例もあった。キクチ自身も友人の部屋探しに付き合った時に、その日に回った5ヵ所以上で家主の態度に人種的な感情があると記している（Kikuchi October 21, 1944, 6181; October 3, 1944, 6094; October 31, 1944, 6245）。

こうした差別にあいながらも、日系人同士でアパートの部屋を共同で借りたり、部屋探しについての情報交換をしたりして、再定住先で何とか定着し始めた。「社会的な支え合いのネットワーク」がシカゴの日系人の間に生まれてきた。彼らはダンス・パーティーや社会的な催しなどを組織し始めた。二世の「米国慰問協会」（United Service Organization）を立ち上げようとする動きもあった。二世の社会が少しずつ出来つつあった（Brooks 2000, 1684; Kikuchi October 15, 1944, 6156）。

しかし、再定住した日系人たちは西海岸への帰還や収容所の家族の再定住について考えていなかったわけではない。シカゴの日系人の間でも西海岸に戻ることが話題となっていた。キクチもロサンゼルスの知人から手紙をも

らったというインタビュー対象者から西海岸の情報を聞いたり、友人との会話でカリフォルニアにまもなく帰れると聞いたという話や、WRA がすでに約千人の帰還を許可したという噂話をしたりしている（Kikuchi October 17, 1944, 6171; October 28, 1944, 6233; October 31, 1944, 6251）。

1944 年 12 月 17 日の陸軍省による立ち退き令撤廃の翌 18 日に WRA は「プログラムの最終段階に入った」として収容所の閉鎖と、出所規定の変更を発表した。閉鎖はその 3 カ月前に発表されること、食べ物、住居、医療などは最後まで提供され、学校は現在の年度で終わること、出所許可が不必要になったこと、家族の再定住のために収容所を訪れることはできるが、一旦再定住のために出所した者が収容所に住むことはできないこと、その他旅費や住居などの支援についての規定が出された（WRA [July 1 to December 31, 1944] 1992, 3-6）。

1945 年 1 月 2 日の時点で収容所には約 8 万人の日系人が残っていた。戦時中の再定住が進むことで、収容所内の人口構成は変化していた。収容所ができた 1942 年には一世が 37,089 人、二世が 73,353 人だったが、1944 年 12 月 31 日には一世は 33,150 人とあまり変化がないのに対し、二世は 46,610 人に減少していた。残っている一世の中で 20,769 人が 50 歳以上で、二世の 29,149 人が 19 歳以下だった（WRA [January 1 to June 30, 1944, 6; July 1 to December 31] 1992, 1944, 52）。就職先や入学先を得て出ていける人たちは既に再定住してしまっており、そうでない人たちが残っているという状態だった。彼らの多くは WRA の同化・拡散政策に合わないと見なされていたか、東部や中西部への再定住に関心がないか、あるいは経済的にやっていけない人びとだった（増田 2000, 28）。

再定住した日系人たちも、収容所の閉鎖発表を聞いて、残っている家族の再定住をどうするのか心配した。年老いた一世や学齢期の兄弟の面倒を見られるのか、自分たちの家探しでも大変なのに家族の分も探せるのかといった悩みを抱えることになった。彼らの反応をキクチは次のように記している。

> 収容所閉鎖のことを聞いて少し心配をしています。父母からは何の計画も聞いていません。彼らがカリフォルニアに行きたくないのはわかっています。アパートを探して、彼らをここ［シカゴ］に連れ出したいです。彼らも少しは働けるし、費用も払えるでしょうから。彼らに尋ねたことがないので、以前からいくらお金を貯めているのかわかりません。…私の父はひどく年老いているので、そんなに働くことはできません。ここ

> で家を探すのはとても難しいので、私はどうしたらいいのかわかりません。WRAが本当に収容所を閉鎖するつもりなのか成り行きを見るつもりです。WRAは私たちにつらい思いをさせています。彼らは私たちみんなに再定住を促しているけれど、私たちの両親を私たちに押し付けると、非常に大変で私たちは彼らを養うことはできないでしょう。…もし本当にWRAが私たちを助けたいなら生活を始めるためにもう少しお金を両親に与えるべきです（Kikuchi April 22, 1945, 7460-7461）。

家族の面倒を見なければという思いはあるが、実際にはどうしたらよいのかわからず困っている様子や、WRA の政策への不信感や不十分な援助に対する不満が見て取れる。

また、家族が収容所の中と外に別れていることも、意思決定を困難にしていた。手紙のやり取りや収容所の家族を訪ねることはできたが、言語の問題から日本語と英語の手紙をそれぞれ誰かに訳してもらわなければならなかった。

> 私の家族は7名がまだ収容所にいて、彼らがどうするつもりなのかわかりません。私の父は最初からもう一度農業をやり直すのは不可能だと思っているので、彼らがカリフォルニアに戻るだろうとは思いません。新しく始めるための設備がないし、いずれにせよお金があまりにもかかるでしょう。私は日本語でどう書いていいかわからないし、私の両親は英語が書けないので、彼らと再定住について話し合ったことが全くありません。両親はどうしたらいいのかわからないので、収容所に残り、どうなるか様子をみると私の妹が手紙を書いてきました（Kikuchi May 12, 1945, 7717）。

世代間の価値観の違いのため、若い二世が年老いた一世を助けることを難しくしている側面もあった。収容所生活によって、一世男性は一家の稼ぎ手として地位を失い、家族に対する権威も失った。しかし、世代間の力関係の変化や一世の置かれている経済状況にもかかわらず、一世にとって二世はいまだに「赤ん坊」であり、再定住に関しても二世の意見を聞こうとしない場合もあった。

> 私の父は頑固なので、彼に何も提案することはできません。彼は私の意

見を聞こうとしません。なぜなら、若者から、特に自分の娘からのアドバイスに従うことは自分の価値を下げることだと思っているのです。彼は私がまだ子どもで、自分で考えられないと思っているのです。…家族の再定住のための私が立てたいかなる計画も彼は信用しません（Kikuchi May 12, 1945, 7718）。

年老いた一世が再定住することは経済的に難しいことから、本当にWRAは収容所を閉鎖するつもりなのか見極めようという姿勢が収容所の外にいる人びとの間に見られた。無理やり追い出されることはないだろうという思いを持つ者や政府機関による何らかの経済的援助を求める者もいた。

WRAが完全に閉鎖するとは思えません。居残っている人びとのために1つか2つ収容所を開けておかなければならないでしょう。収容所のすべての人がどうやったら出ていけるのかわかりません。なぜなら彼らの中には年老いて病気の人がたくさんいるのだから（Kikuchi May 4, 1945, 7598-7599）。

WRAは年末までにすべての人を収容所から追い出そうとするでしょうが、人びとが出ていくとは思えません。WRAは単に彼らを門から押し出したりはしないでしょう。それは民主的なことではないから。…彼らはあまりに年老いているから、政府は彼らを援助するためのある種の法案を通過させなければなりません（Kikuchi May 12, 1945, 7717）。

その一方で、収容所に残されている子どもたちの教育環境や将来を考えると、再定住政策を進めるべきであるという考えの者もいた。WRAは収容所に居残ろうとする人びとを防ぐため、様々なサービスを縮小していった。特に、1945年の春学期を最後に収容所内の学校は閉鎖された。初等・中等教育を受けていた兄弟姉妹がいる再定住者は、彼らの教育をどうするのかと心配した。収容所にいる二世の中には出所したくても、若すぎて出られない者もいた。再定住を家族と話し合うために4月にトパーズ収容所（ユタ州）を訪れたある二世は、次のようにキクチに語っている。

私はちょうど食堂の時間に到着しました。すべてが活気がなく、静かでした。打ち捨てられたゴーストタウンのようで、悲しい気持ちになりま

> した。…収容所にいる若い二世が気の毒でした。彼らには若者が持つべき活力がないのです。日曜日に教会に行くと、そこの二世のメンバーには活気が全くありませんでした。彼らは生気なく歌を歌い、私はその場の絶望した雰囲気に気づきました（Kikuchi July 10, 1945, 8348）。

学校をはじめとする福祉サービスが閉鎖や縮小されていくと、収容所はいつまでもいる場所ではないので、閉鎖は仕方がないという考えを持つ者たちも出てきた。特に、既に家族が出所してしまった再定住者は、収容所閉鎖を受け入れる考えを持つようになっていた。戦争中の仕事がある時期に出た方が仕事を見つけやすいという理由や閉鎖によって人びとが動き出すきっかけになり、収容所に残ることは「インディアン保留地」にいるのと変わらないという理由によるものだった。

> 私の両親はコロラドに再定住しているので、私は嬉しいです。私の兄は農場を経営しているので、今のところ徴兵されそうにありません。だから、彼は両親の面倒を見ることができます。…ある意味、WRAがあらゆる方法で、でも残虐な方法ではなく、日系人を収容所から追い出すのはいい考えだと思います。…人びとにとって仕事を探し、戦後のためにお金を貯めるのに最高の時期だと思います。戦争中収容所に残っていると、後で仕事を得られなくなり、一層暮らし向きが悪くなるでしょう。もし日系人が収容所を出れば、私がそうだったように、外は全く悪くないとわかるでしょう（Kikuchi June 22, 1945, 8134-8135）。

> もし収容所がすぐに閉鎖されなければ、人びとはそのまま居続け、外に出る努力を全くしないでしょう。子どもたちは出たいかもしれないのに、両親なしでは無力で、高校を出るまで収容所で過ごすのは意味がありません。一世は外に出たくなくて、［出所は］不可能なプログラムだというたくさんの言い訳をひねりだしているように思えます。たとえ最初のうちはつらくても、WRAにあまり頼らないほうが彼らにとって良いことだと思います。特に年老いた人びとにはつらいだろうけど、私は一世に保留地にずっといてほしくないのです。（Kikuchi July 7, 1945, 8289-8290）

収容所の外に出た人にとり、再定住そのものは彼らに戦前には得られな

かった就職や就学の機会をもたらした。彼らは、西海岸にいたままでは得られなかった機会を得、経験することができたという思いがあった。かつては一世の監督下にあった二世が、「仕事に出かけ、自分で家探しをすることで自信を得た」（Kikuchi July 7, 1945, 8308）。そのため、収容所に留まり続けることに対して否定的であった。

しかし、再定住をして、既に家族も収容所を出てしまい、再定住が緊急の問題ではなく、収容所の閉鎖は仕方がないと思う人も、家族がまだ収容所に残っており、どうしたら良いのか困っている人も一様に WRA による援助の必要性は感じていた。特に、経済的に自立できずに残っている年老いた一世に経済的な援助をすべきだと考える者が多かった。実際、収容者たちは 1945 年 2 月 16 日から 24 日までの 9 日間、「全収容所会議」（All Center Conference）をソルト・レーク・シティで開催した。会議の結果、再定住に対するローンや補助金の増額などの金銭的援助、高齢者や貧窮者の保護、住宅の確保などを求める要求を決議したが、WRA はその要求のほとんどを拒否した。WRA は 1 人につき目的地までの片道の交通費と 25 ドルしか援助しなかった（Nishimoto 1995, 202-206）。収容所に残っていた人びとも再定住した人びとも WRA の不十分な援助に不満を抱いていた。

> 私の友人たちは収容所の閉鎖を心配していますが、家族が外にいるので、私のような者はあまり心配していません。でも、何もできない家族にはとても同情しています。…もしWRAが人びとを出て行かせたいなら、出るために何かを提供しなければならないことをもういいかげんにわかるべきです。人びとは収容所に入れられ、3年後彼らのすべての資産は使い果たされてしまいました。彼らがもう一度外の社会に再適応するのは簡単なことではありません（Kikuchi June 18, 1945, 8078）。

このように、収容所の外にいた日系人たちは、収容所の家族の正確な考えがわからず、彼らをどのように支援したらよいのか明確な計画を立てられずにいた。WRA の収容所の閉鎖政策や再定住のための援助について不満を持っていたが、収容所はいつまでもいる場所ではないという認識もあった。収容所閉鎖に対する見解の違いには既に再定住を経験している者とそうでない者、世代間の違い、経済的見通しの有無があった。

2．西か東か：西海岸への帰還

西海岸への帰還許可は収容所に残っている人たちだけでなく、再定住した日系人自身にも今後どうするのかといった選択をせまるものであった。彼らは西海岸に対して複雑な思いを持っていた。西海岸の排日運動、職探しや家探しの問題、不十分な情報、そして徴兵の可能性や家族の再定住といった将来の計画を立てるのを困難にする不確定な要素は帰還を躊躇させた。

西海岸の排日的な世論は収容所に残っていた人びとだけでなく、再定住した日系人にとっても不安材料だった。西海岸への帰還が許可されたからといって、排日的な世論がなくなったということではない。日系人の立ち退き後も、西海岸では日系人が戻ってこないようにする排日的な運動は続いた。戦前から排日運動の急先鋒だった「カリフォルニア州移民委員会」（California Joint Immigration Committee）、「ゴールデンウェストのアメリカ生まれの息子と娘たち」（Native Sons and Daughters of the Golden West）、「アメリカ在郷軍人会」だけでなく、戦時中のヒステリックな状況下で設立された多くの新しい組織も日系人の帰還に反対した。こうした組織は、憎悪に満ちたパンフレットを次々と発行した。これらのパンフレット類は、「裏切り者」、「信用できない」、「無責任」、「非人間的」、「堕落者」、「不信心」、「非情」、「不忠誠」といったステレオタイプで日系人を描いた（Girdner and Loftis 1969, 356-357）。

西海岸への帰還が始まると日系人の住居への放火や銃による襲撃などの排日事件が頻発した。西海岸への帰還が許可された 1945 年 1 月 2 日からの約半年間にカリフォルニア州では銃による襲撃 20 件、ダイナマイトによる爆破事件 1 件、放火 3 件、脅迫 9 件が報告されている。その最たる事件が、カリフォルニア州ニューキャッスル近郊の農場に 1945 年 1 月に帰還したドイ家への襲撃である。帰還後すぐに納屋が放火された。襲撃者たちは家に向けて発砲し、ダイナマイトを納屋に投げつけていった。無断外出の兵士 2 人を含む 4 人の襲撃者が逮捕されたが、彼らは裁判で無罪となった（WRA [January 1 to June 30, 1945] 1992, 12）。

こうした西海岸の排日行為は再定住した日系人の間にも伝わっていた。「日系市民協会」（Japanese American Citizens League, 以下 JACL）のトーマス・ヤタベはキクチに西海岸での排日行為は「二世に急いで戻ろうとする前に立ち止まって考えさせる」と述べている。キクチの周りの二世も西海岸の状況に関心を持っていたが、恐れも抱いていた。戻るのに「まだいい時期だとは言えない」という手紙を西海岸にいる知人からもらう者もいた（Kikuchi

December 22, 1944, 6605; May 8, 1945, 7656)。JERS の一員だったトーゴ・タナカは 1955 年に戻ったが、当時は「カリフォルニアに帰りたくなかった。あんな扱いを受け、追い出され、やっと自分を歓迎してくれる場所に住む機会を得たのになぜ帰るのか」と述べている（*Regenerations* 2000, 455）。

JERS のプロジェクトの話し合いを兼ねてキクチ自身も 1945 年 1 月下旬から 3 月上旬までカリフォルニアを訪れ、妹たちに日系人の帰還に反対する動きについて手紙で伝えている。日系人と経済的に利害関係にある農業組合や一部の農村地域は日系人の帰還に猛烈に反対しており、「国外追放」を求めたり、暴動を示唆したりするような動きを見せているが、こうしたグループは「たとえ大騒ぎをしても社会全体の支持を得ておらず」、「こうした反動的でファシスト的な運動にもかかわらず、広がっていないように思う」と書き送っている（Kikuchi March 5, 1945, 7119-7120）。しかし、こうした事件は収容所内外の日系人の帰還をためらわせた。

> マイヤー［WRA 長官］は収容所の人びとにこうした自警団などの脅しは単なるはったりだと言っているが、彼らにとっては現実のことである。極端な事件のみ公表する新聞からこのような事態の歪められたイメージを得るのは不幸なことだ。少数の立ち退き者が帰還して以来、過去のなりゆきから中西部よりもカリフォルニアで多くの事件が起こっている。しかし、カリフォルニアの大多数の人びとはイリノイやその他の州の人びとと変わりはない。…昨夜のサンノゼの事件は収容所にあっと言う間に駆け巡り、彼らの恐怖心を強め、再定住を遅らせるだろう（Kikuchi March 7, 1945, 7144）。

西海岸に戻ることをためらわせた 2 つ目の要素は経済的な自立の問題である。すでに再定住した日系人は今いる場所と西海岸とでの経済状況や得られる職の可能性を比較しようとした。終戦の可能性が見えてくると、軍需産業の仕事に就いていた二世は、戦争が終わると仕事を失い、職をめぐる競争が激しくなるのではないかと心配した。特に戦前の西海岸では高等教育を受けていても専門職に就けなったことから、西海岸での就職の機会に悲観的な見方をする者もいた。「カリフォルニアでのチャンスは未だに二世には閉ざされており、自分の専門分野で職に就こうとするのは困難なのでカリフォルニアに戻って生活するかどうかわからない」、「両親はおそらく私にカリフォルニアに帰ってほしいのだろうが、戦争中はシカゴにいようと思う。ここの方

が私にとって仕事のチャンスがあるから」、「あまり多くの日系人はまだシアトルに戻っていない。なぜならそこは軍需工場がある軍事指定地域で人が殺到しているから」といった声が聞かれた（Kikuchi April 22, 1945, 7466; May 4, 1945, 7596, 7599; May 8, 1945, 7656）。

また、徴兵の可能性も再定住をした日系人にとって自分たちの将来や家族の再定住を計画することを妨げていた。真珠湾攻撃以降、4 － C（兵役を免れる外国人）か 4 － F（兵役不適格者）に分類されていた二世男子に対して 1944 年 1 月 20 日に選抜徴兵制度が復活した。日系人に対する徴兵制度復活の背景には、JACL が日系人の忠誠心を示すため兵役につく機会を求めたことが発端にあった。この要請を受けて、陸軍省は 1943 年 1 月に二世男子を対象に「日本人を祖先に持つアメリカ市民の声明」と題する質問票を配布した。これと並行して WRA は、出所に必要な情報を得、再定住政策を推進するため、17 歳以上の収容者全員を対象に「戦時転住局仮出所許可申請書」という質問票を配布した。この質問書の中で「アメリカへの無条件の忠誠」を誓い、日本の天皇や外国の政府、組織に対する「いかなる形でも忠誠あるいは服従を否認」し、機会があれば軍に志願するかという質問に「イエス」と答えると、出所の規定を満たしたと見なされた（飯野 2000, 111-113）。1943 年 2 月に二世から成る戦闘部隊の結成が承認され、3 月にハワイから志願した約 1 万人のうち 2,686 人と、アメリカ本土から志願した 1,256 人のうち約 800 人が入隊を認められた（Niiya 1993, 138）。つまり、1943 年の時点では質問票に「イエス」と答えても強制的に軍に入れられることはなく、収容所からの再定住を望めば認められることを意味した。しかし、選抜徴兵制度の復活により戦時中に再定住を認められた二世男子は、健康診断で 1 － A（兵役につくことができる地位）と判断されると、軍にいつ徴兵されてもおかしくない状態になったのである。

いつ徴兵されるかわからない状態で、西海岸に戻って生活を再建する計画を立てるのか、または再定住先にとどまって収容所に残っている家族を出所させて経済的に自立していくのかを決めることは困難であった。キクチがインタビューした多くの者たちは、確固たる計画を立てられず、成り行きを見守るしかない状態にあった。夫が 1 年以上前に 1 － A に分類された女性は突然彼が徴兵されるのではないかと常に心配しており、あと 1 カ月で 30 歳になれば徴兵の可能性が減るのではないかと考えていた。彼女は徴兵によって夫の収入がなくなり、家計が非常に苦しくなるのではないかと恐れていた（Kikuchi May 15, 1945, 7758）。彼らの多くを悩ませたのは、従軍することで

アメリカに忠誠を示すかどうかということよりも、いつ徴兵されるかわからないという中途半端な状態に置かれていることで将来の計画を立てられないことだった。

こうした問題に悩まされている二世の間で、カリフォルニアに戻ると徴兵されるという噂が広まり始めた。たとえ4－Fであっても徴兵委員会が彼らを徴兵するので西海岸に行っても無駄であるといった話もあった（Kikuchi April 25, 1945, 7504）。また、西海岸の排日も恐ろしいけれど、西海岸に戻れない理由として徴兵猶予の資格を失うかもしれないことを挙げている人もいた。

> ［夫は］背中が弱いので身体検査に合格するかどうか疑わしく思っています。でも、カリフォルニアの徴兵委員会は二世が戻ってくると同時に彼らを徴兵すると聞いたことがあります。私には38歳で子どもが5人いる友人がいますが、彼は39歳になるまでカリフォルニアに戻る計画を立てるつもりはありません。彼は39歳の誕生日に盛大なパーティーを開くつもりです。なぜなら［39歳であれば］彼は絶対に徴兵されないからです（Kikuchi May 15, 1945, 7762-7763）。

このような噂が広がるほど日系人たちは不安になっていた。噂をキクチに教えた知人は、西海岸に帰りたくない本当の理由は、今よりもいい仕事が得られないであろうこと、カリフォルニアでやり直すのにお金がかかることだと述べている（Kikuchi April 25, 1945, 7504）。噂を口にしている人びとは、経済的な不安や将来をかかえていた。不安な状態に置かれた日系人の間でフラストレーションが高まり、一時的にこのような噂という形になっていた（シブタニ 1985, 246）。経済的な不安は、徴兵の可能性によってさらに高められた側面があった。

さらにはWRAの収容所閉鎖政策の結果、家族の出所が増えてくると、住居探しの問題が深刻になってきた。西海岸への帰還が許可された当初は、排日への恐れから西海岸に戻る人の数は少なかった。それでも、収容所内のサービスの削減や学校の閉鎖などが進むと、出所する人びとも少しずつ増え始めた。1945年1月には約1,200人しか出所しなかったが、2月、3月の2カ月間で約4,600人が、収容所の学校が閉鎖された6月には約5,000人が出所した。1945年の最初の半年で15,907人が出所し、4,922人が西海岸の3州に戻った。加えて、一旦は他の州に行ったが、約1,200人がその後西海岸に戻っている

（WRA [January 1 to June 30, 1945] 1992, 19, Table VII）。

中西部や東部に再定住せずに 1945 年 1 月の西海岸からの立ち退き命令が解除されるまで収容所に残っていた人びとの多くは、西海岸に戻ることを希望していた。収容所の外で家族の再定住を助けようとした人びとは彼らの希望を理解しつつ、住宅探しの問題に直面した。WRA も西海岸に戻る人びとにとって住宅探しは最も困難な問題だとしている。戦時産業の労働者が西海岸に大量流入したため、状況は悪化していた。家の権限を取り戻せても占有権を取り戻すのは難しかったり、不動産が荒らされていたりした。住宅を確保できない人びとは仮住まいを強いられた。彼らはキリスト教会や仏教会が開いたホステルや連邦公共住宅局が斡旋する戦時住宅やトレーラー・キャンプなどに身を寄せた（WRA [January 1 to June 30, 1945] 1992, 16-17）。

> 私の両親は今、バークレーに戻って、戦争が終わるまで家政婦や庭師の仕事をしたがっています。私たちの家がそこにあるのですが、臨時収入を得るため貸したままになっています。…私たちはまずバークレーにずっと住むのかどうかを決めなくてはなりません。そしてそれは答えを出すのが難しいです（Kikuchi May 4, 1945, 7596）。

> 私は今でもシアトルに帰りたいです。でも、私の白人の友人がまだそういう時期ではないと手紙で知らせてくれました。チェット（夫）と私は戦争が終わるまで待つことに決めました。なぜなら私たちにはサンディ（娘）がいるし、先駆者になるべき立場にはないからです。…チェットは以前の仕事を取り戻せるとは思いますが、住宅についてはどうすべきかわかりません（Kikuchi May 8, 1945, 7656）。

排日運動の噂や厳しい住宅状況から西海岸に戻ることをためらっていた。かといって、東部や中西部に留まり続けることにも決心がつかずにいた。住宅探しが難しいのは、東部や中西部、特に都市部においては同様であった。ましてや、収容所から家族が来るとなると、今まで 1 人で、もしくは兄弟で住んでいた小さめのアパートや住居から部屋数の多いところを探して引っ越さなければならなくなった。戦時中の好景気でアフリカ系アメリカ人や南部からの労働者が仕事を求めてやって来たため、住宅の供給が追い付かない状態であった[6]（Robinson 2012, 51）。日系人の中には住むところを見つけるまで、ホステルなどでの仮住まいをしなければならない者もいた。日系人たち

はより良い場所を見つけようと必死だったが、家族のために満足のいく住居を探すことはかなり難しかった。収容所から家族がやってきても、一緒に暮らせないのではないかと心配する者もいた。学齢期の子どもにとっては収容所を出たほうがいいが、彼らが親から一時的にでも引き離されることや、子どもを再定住させたのはよいけれど、十分な住宅が見つからず、親を呼び寄せられない場合の不安があった（Kikuchi May 24, 1945, 7834）。

> ここ［シカゴ］のほとんどのアパートは低水準で、家族のための場所を見つけるのはほとんど不可能です。私はもう一度家族と一緒になりたいと切望していますが、十分な大きさの場所を見つけることができません。私の友人たちはみんな同じような立場にあります。私たちの現在のアパートは人が多すぎて、家族が住むことはできません（Kikuchi June 18, 1945, 8077）。

住む場所を見つけた者たちもずっと再定住先にいるかどうかは決められずにいた。住環境が子どもをのびのびと育てるのには満足のいくものではなかったり、年老いた親にとって気候の温暖な西海岸に比べ中西部や東部の気候は厳しいものであったりということが理由であった。また、夫が従軍している者は、除隊してくるまで最終的な決定を下すことができずにいた。一人暮らしに慣れてしまい、再び親と共に暮らせそうもないという者もいた（Kikuchi May 30, 1945, 7935-7936; June 11, 1945, 8022; August 3, 1945, 8533）。

キクチはタンフォラン仮収容所（カリフォルニア州）で同じ建物に住んでいた家族のその後を追跡してみたところ、彼らは全米に散らばっており、親は収容所に残っており、子どもたちは再定住しているか、従軍している場合がほとんどであった。兄弟姉妹でも再定住先がばらばらで家族離散のような状態の者もいた（Kikuchi July 10, 1945, 8341-8343）。再定住した人びとは収容所にいる人びとと同様に、故郷への関心はあるものの、戦時中の先行きのわからない状況や西海岸の状況に不安を持っていた。加えて、徴兵の可能性が再定住の事態を複雑化していた。

西海岸の立ち退き令が解除された 1945 年 1 月から最後の収容所が閉鎖された 1946 年 3 月までの間、人びとはどこに行くべきか迷っていた。1945 年の後半になると西海岸に戻る人と東部や中西部に行った人の数は逆転した。収容所が閉鎖された 1946 年の時点では、一旦他に再定住してから戻ってきた約 5,600 人を含む約 57,000 人が西海岸 3 州に戻り、約 5 万人が他の州に再

定住した（WRA [January 1 to June 30, 1946] 1992, 11）。西海岸での排日の恐れや住宅探しや経済的不安から 1945 年前半は様子見だった人びとが、排日事件の数が減り始めたことや、終戦を迎えて徴兵の可能性が少なくなったことで、1945 年後半頃から次第に戻り始めた。WRA の「全米に拡散」という再定住政策の影響が残っていたが、人びとはその政策を受け入れていたわけではなかった。

3．チャールズ・キクチと家族の再定住

キクチは JERS の研究者としてシカゴの日系人たちに収容所の閉鎖や家族の再定住についての考え、彼ら自身の将来の計画についてインタビューを行う一方で、収容所に残っている自分の家族の再定住について考えなければならなかった。キクチの家族は、1944 年 12 月の時点で 8 人兄弟のうち、キクチを含む 6 人は再定住しており、姉のマリコとすぐ下の妹アリス、弟のジャックは結婚していた。母親のシズコと弟のトムと妹のミヤコは収容所に残っていた。立ち退き令撤廃や収容所閉鎖の発表の前から、母親からトムを出所させたいという手紙をもらっていた。1944 年 12 月 17 日の陸軍省の発表は収容所の中では収容所発行の新聞やマイヤーの発表によって、そして収容所の外ではラジオで知ることができた。キクチは陸軍省の発表がその日のキクチ家の夕食の席に波紋を起こしたことを日記に記している。妹のエミコは、西海岸は気候が良いだけで、あとは何もないし、看護学校にあと 3 年通わなければならないので帰らないと述べている。一方、もう 1 人の妹のベティは、仕事も得られるし、学校にもいけるし、親友はみんなカリフォルニアにいるので帰りたがった。フィリピン系の妻がカリフォルニアにいる弟のジャックは兄弟の中で最も熱心に戻りたがっていた。収容所に残っている弟妹が再定住しようとしている時に家族を捨てるようで後ろめたく思わないように、キクチは弟に西海岸に戻ることを勧めている（Kikuchi December 17, 1944, 6559-6562）。キクチの兄弟の間でも西海岸に戻るかどうかや収容所に残っている家族をどうするかは立ち退き令撤廃のその日から大きな懸案事項となった。

キクチは、収容所は多くの人にとって永続的な機関ではないと考えていた。他の再定住者同様に、戦争が終わる前に子どもたちは収容所を出るべきであり、弟を収容所から再定住させる必要性を感じていた。しかし、年老いた一世はどうなるのかと心配した。さらに、キクチは自身の経済力で弟だけでなく母親と妹も再定住させ、すでに外にいる 2 人の妹を学校に送ることはでき

るのか不安を感じていた（Kikuchi January 18, 1945, 6761; January 23, 1945, 6803）。

年が明けて 1945 年になると弟のジャックは西海岸にいる妻のもとに行き、キクチも JERS の打ち合わせで 1 月の終わりから 3 月の初めまでバークレーを訪れた。その帰りに今後の話し合いのため、母親たちがいるヒラ・リバー収容所にも 1 週間滞在した。彼が収容所で見かけたのは、幼い子どものいる家族と高齢者ばかりだった。キクチの母親は収容所に残りたがっており、追い出されることを恐れていた。しかし、学校が閉鎖されるなら、カリフォルニアでもシカゴでも行くつもりだとキクチに伝えている。母親は仕事を探すつもりでいたが、彼女の身体が弱いので現実的な考えではないとキクチは心配していた。母親が収容所にいる子どもたちの決定権を持ちたくて経済的に自立したいのは理解できるが、常勤の仕事で働くのは非現実的だとキクチはシカゴにいる妹たちに手紙で記している。実際、母親は体調を崩して入院してしまい、キクチは収容所にいる間に再定住について彼女と話し合うことができなかった（Kikuchi March 11, 1945, 7164; March 12, 1945, 7167, 7180）。

代わりにキクチは収容所に残っている人びとに再定住についての考えを聞いて回った。多くは、再定住してしまった人びとの心配事と同じで、排日感情を恐れて成り行きを見守ろうということや、立ち退きで資産を失ってどうしたらよいのかわからない、年老いた一世には無理である、西に行くべきか東に行くべきか決められない、収容所の閉鎖を信じないといった意見だった。それでも、子どものいる家族は教育を受けさせなければならないと感じており、収容所を出ていきたくなくても、子どものためにそうしようとしているという話を聞いた。キクチも弟を学年末までに連れ出したいと妹たちに手紙で述べ、はっきりした計画を立てる時だとしている（Kikuchi March 12, 1945, 7169-7172, 7181, 7183; March 14, 1945; 7194）。

しかし、キクチの徴兵問題が計画を立てる妨げとなっていた。キクチは 1 － A になっていたが、JERS の研究員としての仕事を理由にカリフォルニア大学バークレー校を通じて、兵役猶予を願い出ていた。1945 年 4 月に再び 1 － A に再分類されたが、大学側から徴兵委員会に訴えてもらい、少なくとも 60 日間延期されるだろうが、この決定が覆される可能性もあるという手紙をもらった。キクチは自分がしなければならない「やり残している仕事」を心配し、この先数カ月（ソウル・ベローの小説のような）「宙ぶらりんの男」になることを嫌がったが、そのような状況に対して何もできないでいた（Kikuchi April 4, 1945, 7342-7343）。苦しい胸の内を次のように記している。

妹の来年の学校の計画をどうしたらいいのかわからない。応募した2つの奨学金は未定のままだ。…本当に今身動きのとれない状態になっている。決定的なことができるかどうかわからない。自分の状況がはっきりしない時に、家族を連れてくるのは愚かなことだ。でも、いずれかの決断をしなければならない。もし徴兵されたら軍からの扶養手当を求められるように、すぐにアパートを探して家族を呼び寄せようと思った。その一方で、ママのあまりよくない健康状態を考えなければならないし、緊急事態が起きたときの病院治療のための何の備えもできていないので、あまりにも危険だから彼女を連れてくることはできない（Kikuchi April 4, 1945, 7343-7344）。

キクチは多様な人種的背景を持つ子どもがいる孤児院で育ったという経歴から「典型的な二世」からかけ離れており、また自分自身でも「立ち退き者に厳しく、立ち退きや困難な状況を生み出した政治システムの代わりに彼らを非難する傾向」があると自覚していた。収容者の「全収容所会議」の要求についても「過度なもの」であり、たとえ認められても彼らは「外に出るのを死ぬほど怖がっているから、さらなる言い訳をするだろう」と批判的だったが、家族の再定住については他の二世と同様の悩みを抱えていた。彼は、家族のいる再定住者は自分同様に混乱しており、徴兵される可能性のある者はその不安定な立場のため、悩んでいると考えていた。キクチが心配していたのは、家族を収容所から再定住させた途端、徴兵されるという「だから言わないこっちゃないというしっぺ返し」に遭うかもしれないことだった（Kikuchi February 20, 1945, 7049; March 7, 1945, 7142-7143; April 12, 1945, 7386）。そして、これは他の二世にも共通する悩みであり、この問題においてはキクチも「典型的な二世」の 1 人だった。

キクチは収容所にいる母親に自分の状況と 2 つの仮の計画を手紙で送っている。1 つ目はカリフォルニアに戻った弟ジャックのところに行き、彼の義父の店で働くというものである。2 つ目の計画は学校が終わり次第、弟のトムはシカゴに来て、その間にキクチがアパートを探し、7 月か 8 月に母親と妹も合流するというものである。ただし、2 カ月後に徴兵される可能性があることも付け加えた（Kikuchi April 12, 1945, 7390）。

キクチは家族の再定住先の問題、家族がシカゴに来た場合の家探し、自分と兄弟姉妹の教育費や生活費、徴兵の問題を抱えていた。母親が再定住先をシカゴにするのかカリフォルニアにするのかを明言しないので家探しをどう

するのかを決められずにいた。生活費に関しても同様で、収容所の家族がどこに行くのかで変わってくるが、姉やカリフォルニアにいる弟にも少し負担してもらうつもりでいた。教育費に関しては、シカゴに既にいる妹2人の分と収容所にいる弟と妹の分及び自分の分は負担するつもりでいた。しかし、教育費だけでもかなりの額になり、どのようにお金を捻出するか頭を悩ませていた。キクチはイリノイ州公的援助委員会の担当者にキクチ家の5人分の教育費の見積もり額1,139ドルを示し、公的援助を求めている。これに加えて、もし収容所の家族がキクチのもとに来る場合、新しい家具や日用品が必要となると訴えている（Kikuchi May 14, 1945, 7736-7737）。これとは別に、シカゴ大学に入学したがっている妹のために大学法人に更なる援助を得られるかという問合せもしている（Kikuchi March 2, 1945, 7115）。

シカゴでの住宅探しが難航し、自分がいつ徴兵されるのかわからないので、母親にサンフランシスコに来てホテルの仕事をしたらどうかというカリフォルニアにいる弟の提案の方がより現実的だとキクチは考えていた。しかし、もし母親がシカゴに来るつもりでいるのなら、何らかの指示はできないとしている。「何の保証もできないけれど、彼女にいかなる方向でも強制をされたと感じてほしくない」ためであった。母親からは、学校が閉鎖されるので、なるべく早く子どもを外に出したいということ、自分自身については気候が良いのでサンフランシスコに行きたいが、子どもたちと一緒にいることの方が大切だという手紙をもらった。キクチは母親を混乱させたくはないが、可能な代替案を示したいとしている（Kikuchi June 4, 1945, 7954-7955, 7959-7960; June 5, 1945, 7962, 7968）。キクチは同じような内容の手紙をカリフォルニアにいる弟とミネソタにいる妹にも出し、悩ましい現状を知らせている。

> 彼女［母親］の手紙の調子では、気候やその他の困難にもかかわらず明らかに彼女はシカゴの方が良いとほのめかしている。彼女にこちらに来ないようにと提案するようなことはしたくないけれど、徴兵されるような結末から生じる危機的状況から計画の突然の変更に備えてほしい。…新聞広告を見たり、個別の不動産屋に連絡をしたり、友人に尋ねたり、WRAやフレンド教会に問合せをしたりしている。今のところ、深刻な住宅状況のため、十分なものが見つけられずにいる（Kikuchi June 5, 1945, 7963-7964）。

1945年6月11日に徴兵猶予の嘆願を審査していた委員会から更なる猶予

は認められないという通知を受け取った。いつ入隊しなければならないのかはわからないが、いつでもあり得るという状況だった。収容所にいる弟からは6月26日にシカゴに来るという手紙を受け取り、カリフォルニアにいる弟からは自分は人出が必要な造船所で働いているので、兵役の猶予を受けられそうだという手紙を受け取った。ますます母親にはサンフランシスコに行ってほしいという気持ちが強まるが、彼女に強制されたとは思われたくなくて困った状況に追い込まれた。住むところが見つからない状態で家族を呼び寄せるのは「問題外」であった。そこで、暫定的な計画として、家族にサンフランシスコに行くよう助言するA案と弟に収容所を出るのを延期させるか夏の間サンフランシスコに行き、その間に家探しをするB案を作った。キクチが徴兵されるまで弟と一緒に住み、姉とカリフォルニアにいる弟から毎月20ドルの支援を取り付け、その間も家探しを続ける。母親と妹は9月まで収容所に残り、もしその前にキクチが徴兵された場合は、サンフランシスコに行くか、姉の家に一時的に身を寄せるというものだった。その一方で、弟に出発を延期するように伝えたらがっかりするだろうと心配した。家族を再定住させる決断は「現実的ではなかった」と落ち込んだ（Kikuchi June 11, 1945, 8000; June 14, 1945, 8053; June 18, 1945, 8072; June 20, 1945, 8108）。

しかし、フレンド教会を通じて、ついにアパートが見つかった。「奇跡が起きた」、「確実なことのようだけれど、まだ指を重ねて祈っている」と日記に記している。寝室が3つ、居間、食堂、台所がある家具なしのアパートの2階の部屋が家賃ひと月30ドルで借りられることとなった。アパートを確保できたため、キクチは予定通り弟を呼び寄せ、約2週間後には母親と妹をシカゴに迎えることができた（Kikuchi June 21,1945, 8110-8111）。

家探しは解決したが、なかなか入隊の日が決まらないという問題とキクチが入隊した後の家族の生活費をどうするのかという問題が残った。キクチには大学を出た1939年に陸軍に志願し、人種が理由で拒否された過去があった。「当時軍に入るのが究極の目標だった。それが今になってかなうなんて不思議だ」としている。しかし、いつ軍から呼ばれるのかがわからず、「あやふやな状態に置かれる代わりに、さっさとしてくれればいいのに」と何度も不平を述べている。徴兵問題のため「疲れて、落ち込んで」おり、「落ち着かなく、いらいらしている」状態が続いた。7月3日になってやっと7月26日に軍に出頭するようにという通知を受け取った（Kikuchi June 14, 1945, 8052; June 19, 1945, 8087; July 1, 1945, 8216; July 2, 1945, 8221; July 3, 1945, 8228）。

入隊の通知を受け取ると、今度は残り約 20 日間で家族が生活していけるように手配しなければならなくなった。兄弟姉妹と今後家族をどう養っていくのかについて手紙でのやり取りがなされた。兵役を猶予されると思われていたカリフォルニアにいる弟も徴兵のための身体検査の呼び出しを受けた。キクチは WRA やイリノイ州公的援助委員会からどんな準備金や補助金がもらえるのか問合せをした。「一体どうやって収容所にいる一世はこんな面倒な手続きが切り抜けられるのだろうか」と同情を示している。キクチは「生活水準を維持する必要があるが、軍からの家族への特別支払い分 79 ドルとジャック（弟）とマリコ（姉）がくれる額でどうやってやりくりしていくのだろう。今現在、給料の 3 分の 2 が部屋代と食事代に消えていて、今の収入は入隊後の収入よりずっと多いのに」と心配している。キクチが軍に入った後の家計を心配した母親はアパートに下宿人を置こうと提案したが、家族のプライバシーを守るため拒否した。最終的に軍からの扶養家族への特別支払い 79 ドル、姉から 25 ドル、弟から 20 ドルの合計 124 ドルを毎月の生活費とし、足りない分はキクチの銀行口座から補うこととなった。その他、収容所を出た弟や妹の学校の手続きや請求書の支払い、銀行口座、必要な書類など入隊後の事務手続きについて、妹のベティに託した（Kikuchi July 16, 1945, 8405; July 23, 1945, 8460-8462; July 26, 1945, 8488; August 1, 1945, 8536-8537, 8541-8542）。

入隊前日になっても正式な通知が届かず、再びキクチは「あやふやな状態で待ち続ける」ことになる。地元の徴兵委員会に問い合わせると、書類がサンフランシスコに届くまで何もできず、次の入隊が行われるのは 8 月 10 日だと告げられた。そして、7 月 31 日に徴兵委員会からの通知を受け取った（Kikuchi July 25, 1945, 8472; July 31, 1945, 8518）。

キクチにとって、家族の再定住や徴兵は他の日系人同様に悩ましい問題であったが、再定住そのものについてはチャンスを与えてくれるものとして肯定的に捉えていた。シカゴに家族を呼び寄せ、入隊の日取りも決定したことで、「自分に関しては、再定住期は非常にうまくいっており」、入隊は「人生の新しい章」であった。キクチの半生を小説にしたルイス・アダミックに手紙で家族の近況を知らせ、「（結婚して他の州にいる弟妹を除いて）私の残りの家族は今、シカゴにいます。27 か月後、ようやく一緒になることができました。…物事は私たちにとって満足のいくものとなっています。」と伝えている（Kikuchi August 7, 1945, 8581; August 6, 1945, 8571）。

終わりに

戦時中に再定住した人びとは、収容所と関係が切れたわけではなかった。再定住に対する収容所の中の人びとと外の人びととの考えや行動は相互に影響を与え合った。再定住者たちは収容所に残っている家族をどうするのかで頭を悩ませた。特に、WRA の政策に反発して収容所から出ようとしない家族をどうするのかということや、収容所の中と外との距離の問題や一世と二世の言語や考え方の違いから意思疎通が難しく決定的な計画を立てにくいことが、キクチの再定住者へのインタビューや彼自身の経験から明らかであった。また、西海岸に戻るのかそれ以外の地域に行くのかも決めかねていた。収容所に残っている家族の希望する行き先と再定住した人びとの将来的な計画との食い違いが再定住を難しいものにした。キクチや WRA は、西海岸に戻る人が増えていくであろうということを予測していたが、1945 年の前半の時点では排日感情を恐れて西海岸に行くことをためらう人びとが多かった。さらには、どこに再定住するにしても、住宅探しは難しかった。そして、キクチを最も悩ませたように、徴兵の問題が再定住の計画を立てることを困難にした。しかし、彼らの多くは収容所に留まり続けることには否定的であり、再定住した自分たちの経験を肯定的に受け止めていた。

キクチ自身の経験は、キクチがインタビューした人びとの内容を裏付けるものであった。家探しや生計を含む収容所に残っていた病弱な母親や幼い弟妹の再定住先の問題や、その計画を立てるための意思疎通の困難さや徴兵問題など再定住した二世が直面した問題をすべてキクチは経験した。収容所に居続けようとすることに否定的ではあったが、家族を収容所から連れ出すための面倒な手続きを経験することで、キクチは収容所に残っている人びと、特に年老いた一世に理解を示している。他の多くの日系人とキクチが共通していたのは、収容所にいる家族を心配し、彼らと一緒になりたいということである。その背景には、収容所はいつまでも留まる場所ではないという思いや、立ち退きや再定住によって家族が別々の場所で生活をしているという現状があった。その一方で、再定住は二世にとってはある意味チャンスを与えるものであった。キクチにとっても、妹たちに教育を受けさせ、自身がかつて拒否された軍に入り、新しくスタートをきることができるものと肯定的に捉えている。こうした認識は収容所に残っている人びとを再定住させようという行動にもつながっていた。

註

1. 居住地域により立ち退きの時期、仮収容所での収容期間、収容所への移動は異なる。
2. キクチの半生は作家のルイス・アダミックによって伝記的小説となっている（アダミック 1990）。
3. JERS は収容所内の日系人や再定住した日系人についてインタビューを行い、大量の資料、特に「恒久的な価値」がある日刊紙、日記、ライフ・ヒストリー、現地報告書などを収集したが、調査結果が収容された日系人に対して何の利益ももたらさなかったという批判もある（Ichioka 1989, 22）。
4. キクチの日記はカリフォルニア大学ロサンゼルス校が所蔵する Kikuchi Papers とカリフォルニア大学バークレー校がインターネット上で公開している Japanese American Evacuation and Resettlement: A Digital Archive の両方を利用した。
5. WRA の収容所閉鎖の発表の前の 1944 年 6 月 30 日にジェローム収容所（アーカンソー州）は既に閉鎖された。当時、同収容所に残っていた約 5,700 人は他の収容所に移された（WRA [January 1 to June 30, 1944] 1992, 21）。
6. ニューヨークでは他の都市のような白人以外への不動産売却に関する制限契約に直面することはなかったが、不動産価格の高騰のため、日系人は固まって住む傾向にあった（Robinson, 2012, 56-57）。

引用文献

アダミック , ルイス．1990.『日本人の顔をした若いアメリカ人』、田原正三訳、PMC 出版.

Austin, Allan W. 2014. *From Concentration Camp to Campus: Japanese American Students and World War II.* Urbana: University of Illinois Press.

Briones, Matthew M. 2012. *Jim and Jap Crow: A Cultural History of 1940s Interracial America.* Princeton: Princeton University Press.

Brooks, Charlotte. 2000. “In the Twilight Zone between Black and White: Japanese American Resettlement and Community in Chicago, 1942-1945.” *Journal of American History*, 86（4）: 1655-1687.

Drinnon, Richard. 1987. *Keeper of Concentration Camps: Dillon S. Myer and American Racism.* Berkeley: University of California Press.

Girdner, Audrey, and Ann Loftis. 1969. *The Great Betrayal: The Evacuation of the Japanese-Americans during World War II*. London: Macmillan.

『ハート・マウンテン・センティネル』1944 年 4 月 8 日.

Ichioka, Yuji. 1989. “JERS Revisited: Introduction,” In *Views from Within: The Japanese Evacuation and Resettlement Study*, ed. Yuji Ichioka. Los Angeles: Asian American Studies Center, University of California

at Los Angeles, 3-27.

飯野正子 . 2000.『もう一つの日米関係史―紛争と協調のなかの日系アメリカ人』、有斐閣 .

Kikuchi, Charles. “Diary.” Charles Kikuchi Papers, Box 15 and 16, Collection 1259, Department of Special Collections, Charles E. Young Research Library, UCLA, and Japanese American Evacuation and Resettlement: A Digital Archive, Bancroft Library, University of California, Berkeley. 2018 年 9 月 15 日アクセス < http://vm133. lib.berkeley.edu:8080/xtf3/search?rmode=jarda;docsPerPage=10;sort=title;keyword=Kikuchi%20Diary;startDoc=31>

_____ .［1973］1993. *The Kikuchi Diary: Chronicle from an American Concentration Camp*, ed. John Modell. Urbana: University of Illinois Press.

増田直子 . 2000.「収容所から「再定住」への決意――第二次世界大戦末期における日系アメリカ人の社会復帰」『欧米文化研究』18: 25-45.

マイヤー , ディロン S. 1978.『屈辱の季節――根こそぎにされた日系人』森田幸夫訳、新泉社 .

Niiya, Brian, ed. 1993. *Japanese American History*: *An A to Z Reference from 1868 to the Present.* Los Angeles: Japanese American National Museum.

Nishimoto, Richard. 1995. *Inside an American Concentration Camp: Japanese American Resistance at Poston,* Arizona, ed. Lane Ryo Hirabayashi. Tucson: University of Arizona Press.

Okihiro, Gary. 1999. *Storied Lives: Japanese American Students and World War II.* Seattle: University of Washington Press.

Regenerations Oral History Project: Rebuilding Japanese American Families, Communities, and Civil Rights in the Resettlement Era, vol.2. 2000. Los Angeles:Japanese American National Museum.

Robinson, Greg. 2012. After Camp: *Portraits in Midcentury Japanese American Life and Politics.* Berkeley: University of California Press.

Sakoda, James M. 1989. “The ‘Residue’: The Unsettled Minidokans, 1943-1945,” In V*iews from Within: The Japanese Evacuation and Resettlement Study,* ed. Yuji Ichioka. Los Angeles: Asian American Studies Center, University of California at Los Angeles, 247-281.

シブタニ , タモツ . 1985.『流言と社会』、広井脩他訳、東京創元社 .

Thomas, Dorothy S. 1952.*The Salvage.* Berkeley: University of California Press.

United States Department of the Interior, War Agency Liquidation Unit. 1947. *People in Motion: the Postwar Adjustment of the Evacuated Japanese Americans.* Washington D. C.: The Government Printing Office.

War Relocation Authority.［1946］1975a. *The Evacuated People: A Quantitative Description.* New York: AMS Press.

_____ .［1946］1975b. *The Relocation Program.* New York: AMS Press.

_____ .［1946］1975c. *WRA: A Story of Human Conservation.* New York: AMS Press.

_____ . 1992. Quarterly and Semi-annual Reports. Vol. 2. 日本図書センター.